

第一 コメント

中山 俊 宏

きょうのテーマは非常に多岐にわたったので、全体にわたってコメントすることは非常に難しいと思います。私の力にも余るので、各先生方に一点ずつ簡単な質問をさせていただいた後、自分の専門であるアメリカ政治に引きつけて、きょうのテーマである「新時代における日本の役割と展望」というようなことにつなげていけたらと思っています。

まず、水本先生のお話を伺いながら一点疑問というか、私なりに感じたところがありました。まずは「日米関係の維持・改善」をただ繰り返すのみというような思考停止という点について。私は基本的に水本先生のご意見に賛同する部分がありますが、他方で、最近の日米関係をみていますと、いまのあるものをそのまま維持、もしくは改善しようというより、むしろいったんゼロに戻してリセットして、それで再選択するという問題意識があるような気がしてなりません。そこに改憲という話が絡んできます。だから、私は決している日米関係は思考停止状態ではないと思います。一見すると気づきませんが、実は大胆な選択をしようとしている、そのように

感じます。その意味でいえば、次期政権がどうなるかわかりませんが、リセットした後にはまた新たに同盟国としてアメリカを選ぶんだという気持ちがあるのではないか。そういうふうには私は最近の日米関係をみています。

それから、鎌田先生のお話は非常に興味深く伺いまして、私はその分野での知見がまったくないものですから的確なコメントも質問もできないのですが、先生のペーパーを拝見させていただいて、靖国神社参拝をめぐる論議は国民がこれまで封印してきた「兵士の物語」を思い出す作業の始まりともいえようという点は非常に興味深く読ませていただきました。

実は、私は今年の四月までワシントンにおりまして、アメリカ議会の研究に取り組む予定でした。しかし、実際行ってみますと、靖国問題、それから日本におけるナショナリズムの台頭について話してくれという機会が多くて、結局自分で設定したテーマの研究はほとんどできませんでした。逆に、アメリカに行つて日本のことを研究しているという、ねじれた状況になってしまいました。

これはやはり、小泉総理が靖国参拝を続け、去年の九月一日の選挙でその総理を国民が圧倒的に支持したということを受けて、日本で何が起きているのだろうということをも単純にアメリカ人が疑問に感じたためだと思います。

こういう場に直面して初めて、日本人が日本人として自分の国で何が起きているかということを外に対して語らなければいけないという機会ができたという点では、個人的には総理の靖国参拝を支持はしませんが、そういう意味では非常に健全な動きとしてとらえることもできるのではないかと感じました。いままで「兵士の物語」を封印してきたことが、ある種のゆがみに帰結したのでは、そのように感じました。恐らくこの溝は埋まらないと思います。埋まらなくてもいいのかもしれない。こういう議論が表に出てきたことをもって、一つの動きだという評価も可能なのではないかと感じたりしました。

最後、武者小路先生への質問ですが、聞いていて、何というのでしよう、先生はどのように考えられているのかなと感じたのが、例えば日・米・豪の国民がそれぞれ小泉首相、ハワード首相、ブッシュ大統領を選んだという、この厳然たる事実がある中で、先生の指摘された反霸権的な連合を具体的な政策レベルでどのように構築していくのかというイメージがなかなか見えてきません。

つまり、やはりこれは現実の政治権力を奪取しないと変わらない話なのだと思います。旧来の革命論がもはや通用しない状況の中、どのような政治権力奪取のメカニズムを先生が想定されているの

か、その辺について教えていただければと思います。

残りの時間で、私の専門の分野に引きつけてお話しさせていたいただきたいと思います。冒頭にも申し上げたとおり、私はアメリカ政治をみています。いまアメリカでは、この一月に行われる中間選挙をめぐつて政治の季節に入っているわけです。ご承知のように、イラク情勢が非常に悪い。内戦に転化する、転化しているかもしれない、もしくはもう転化したと評価する人もいて、そのイラク情勢をめぐつて、またイラク情勢が対テロ戦争の中でどういう位置づけになるかということに関して、民主党と共和党のあいだで激しい対立があることは日本でも伝えられています。

この民主党、共和党の中でそれぞれどういう力学が働いているかというと、それぞれ真ん中辺にいる人たちはいまい声が上がらねずに、両極にいる人たちが盛り上がっているような状態があります。どういことかと申しますと、民主党の中ではベトナム戦争以来、反戦平和主義グループがいて、長い間発言の機会がなかったのですが、この人たちが盛り上がって、民主党をいわば左のほうにぐつと引つ張っている。他方で、共和党をみると、やはり右にいる人たちが、右というとか非常に言葉の印象が悪いですが、信心深い人たちがあつたりとか、道徳と政治、もしくはは外交分野においてアメリカの力を積極的に行使して、民主主義を世界に植えつけていくような発想を持った人たち、こういう両極の人たちが非常に大きな声を出して、中道穏健派の発言が聞こえにくくなっているという状況があります。

民主党のブッシュ批判をみていくと、いろんな批判の仕方があるのですが、明らかに民主党にとつてはいま追い風が吹いているというところで、ブッシュを批判するだけでいいだろうという考え方があります。これはオルターナティブのビジョンを示さずに、ブッシュ批判のみで今度の選挙は乗り切れるだろうと考えている人たちです。もう一つのグループは、民主党はいままでずっと外交安全保障問題については語れない、つまり反戦平和主義ばかり訴えてきて、敵といかに戦うのかというビジョンがないということで、どうも頼りないというイメージがあつたので、ここでこそきちんとした外交安全保障の政策を語らなければいけないのだという考え方があります。こういうグループと、さきほど申し上げたような反戦平和主義グループが相互に様々な作用を及ぼす形で、いま民主党の中で新たな力学が形成されつつあります。

しかしながら、ここまで追い風が吹いているにもかかわらず、いまち民主党の歯切れがよくないのは、さきほど申し上げたように、民主党が、力の行使の仕方ということについてのビジョンをまだ党として確立していないということにあるのだと思います。

つまり、いまヨーロッパでもアジアでも、アメリカに対する不信感は非常に大きい。しかしながら、アメリカが圧倒的な力を持っているという事実は誰も否定しようがないわけです。その圧倒的な力をどのように使うのかということに関して、共和党は非常にストレートな素朴な議論をしますが、民主党は逆にどのように使えばいいのかというビジョンが欠けていると思われています。それである

がゆえに、外からみていると、どうしてブッシュ大統領が支持されているのだろうと感じたりもしますが、アメリカ国民からしてみると、どうやって自分たちが持つている力を使うのだというビジョンを民主党が提示できていないので、どうしても不安が残ります。

ただ、一月の選挙については、民主党が相当有利に戦うことは間違いないようですが、この選挙の結果がどこまで今後のアメリカ政治のあり方を決定していくのかということについては、私は若干懐疑的にみているところです。

ここで、一気に日本の話に入りたいのですが、今日のテーマである「日本の役割と展望」ということを考えるときに、まず日本がどういう力を持つているのかということとをきちんと考えないといけないのだと思います。どういう分野で日本は何ができるのか。つまり、理念先行型ではなくて、日本はどういう分野でどういう形で国際社会に貢献できるのかということとを考えなければいけないのだろうと思います。

貢献するときというのは幾つかのレベルで考えるわけです。単純にいえば、市民レベルと国家レベルがあるかと思えます。市民レベルと国家レベルの国際貢献が、時に協力し合ったり、時に若干違う方向に行ったり、いろんなあり方があるかと思えますが、やはり市民レベルでしかできないもの、国家レベルでしかできないもの、それぞれどういう分野が得意かということとをきちんと把握しなければいけません。

ちよつと話がそれて、最近の正戦論の動向についてお話ししたい

と思います。なぜこんな話をするかというと、この話が終わった後にわかつていただけたらと思いますが、これまでの正戦論というのはどういうときに武力を行使することが正義とされるかということをめぐる議論でした、つまり基本的には戦争が起る前の基準に関する議論です。しかしながら、最近の正戦論はちよつと位相が変わってきています。といいますのも、冷戦後の紛争の多くはほとんど国内紛争である場合が多い。介入すると、その統治構造が完全になくなる。統治構造がなくなつた後の国家建設・紛争後の平和構築、こういう部分も含めて引き受ける用意がないと、正しい戦争とはもはやいえません。つまり、時間軸が拡がる形で新たな正戦論がいま展開しつつあります。

国家建設とか紛争後の平和構築は日本がもつとも得意とする分野だといえます。ただ、それにもいまのところいろいろな制約があるので、私は基本的にそういう制約は取り除いていくべきだろうと考えています。その過程においては自分の行動、もしくは自分の身を守るために武器を行使しなければならないこともあると思います。

では、どういうときに日本が自ら選んで、出ていって、紛争後の平和構築とか、そういう行為に取り組むのかということですが、アメリカが行けば必ず後からついて出ていくのか、もしくは国連決議があれば自動的に出ていくのか。最近では国連決議がいろいろほかの第三者的な要因で通らないこともありますし、その辺は私もきれいな答えはないのですが、日本としてきちんと考えていかなければいけない問題だろうと思います。

私がこの問題を考えるときにいつも考えるのが、例えばアジアの隣国で大規模な人道的な危機が発生したとする。武力介入をもつてしか、その人道的危機が止められないような状況下において日本人は単純に「我々はできません」といつて、そこから引つ込むことでもいいのか。これは具体的な可能性としてあるわけではありませんが、あり得るシナリオの一つだと思います。武力を行使しないと人道的な危機を止められないような状況があり得るということを想定しつつ、今後日本の役割を考えていかなければいけないのではないかと考えています。